

令和元年 5 月 8 日

## 1816 年南湖にはコウノトリやヒシクイがいた 絵図を解析して当時の生物、植生、土地利用を分析

白河市にある国の史跡名勝南湖の完成 15 年後の 1816 年当時の姿の絵図である「奥州白川南湖真景」に描かれた生物、植生、土地利用を解析し、コウノトリやヒシクイなど現在周辺で見られない鳥類がいたこと、人為をなるべく排して自然にまかせ、周辺の民の利用を妨げないといった書物等により伝えられる松平定信の庭園観と一致する造営や管理がなされたと示唆されることを、共生システム理工学類の黒沢高秀教授が明らかにし、福島大学の紀要『福島大学地域創造』で発表した。

「寛政の改革」等で知られる白河藩主松平定信は、江戸と白河に 5 つの庭園を築庭した大名庭園家としても知られている。国の史跡名勝南湖は、松平定信が築庭した庭園で唯一現存するものである。史跡名勝の指定の際に、当時の大名庭園が大名の独占物であったのに対し、南湖は松平定信の考えにもとづき「士民共楽」（民衆と共に楽しむ）の園地として整備されたものとして評価されている。松平定信が南湖造営に托した意図に関しては、ある程度研究が進んでおり、(1)灌漑用水の確保、新田開発のための条件整備、操舟訓練や水練場所の確保などの実用に供した、(2)自然の地形や景観を尊重してできるだけ手を加えず、自然と人工との調和を図った、(3)柵を設けず共楽亭を開放するなど士民共楽の園地として整備した、(4)十七勝十六景を定め和歌や漢詩を依頼するなど名所づくりをした、などが指摘されている。一方で、造営当時の姿や、生物多様性などの構成要素、管理方法を含む土地利用に関しては、知見が限られていた。

松平定信の侍臣であった岡本茲装（しそう）が著した定信の行状記である『感徳録』には副本があり、これに含まれる絵図である「奥州白川南湖真景」は「従南方望 共楽亭圖」と「自共楽亭 望南方圖」の 2 枚があり、茲装が 1840（天保 11）年に描いた絵図であるとされる。松平定信により南湖が 1801（享和元）年に造園された 15 年後の 1816（文化 13）年の初冬に、定信が南湖で一日を過ごした際に茲装も同行し、この時の様子を描いたとされ、比較的写実性が高いと思われる絵図である。奥州白川南湖真景は、1884（明治 17）年に造園史家の小澤圭次郎によって模本が作られた。模本に関しては、これを蔵している国立国会図書館のデジタルコレクションで高画質の画像が公開されている。

南湖は 1924 年には国の史跡名勝に、1948 年には福島県立自然公園に指定されているが、浚渫や湖岸の埋め立て、水質悪化などにより環境が大きく変わってしまっている。平成 29 年度福島県地域創生総合支援事業（サポート事業）補助金委託事業「南湖の適切な管理方法検討のための流域の生物多様性の解明」（委託事業主：白河 Fun Humans）、

および平成 30 年度白河市委託事業「南湖の適切な管理方法検討のための流域の生態系の基礎研究」の一環として、南湖の適切な管理方法検討のため、松平定信による造園の少し後の姿を明らかにするため、模本のデジタル画像をもとに、1816 年当時の南湖の生物、植生、土地利用の分析を行った。その結果、以下のことが推察された。

- (1)南湖の造営後 15 年を経ても鏡の山などで草原が維持されていたことが伺われ、茅場としての利用が継続されていた。
- (2)岸辺に湿地が発達し、コウノトリやヒシクイを含む多数の水鳥が生息している様子が描かれており、共楽亭周辺などの限られた場所以外は、岸辺を改変しなかった。
- (3)岸辺の湿地には樹木は生育しておらず、ヨシ刈りなどが行われていた。
- (4)植栽が行われたのは共楽亭周辺とその対岸などごく限られた場所のみであり、種類も楓、萩、松、桜と桃などに限られていた。

これらのような、人為をなるべく排して自然に任せ、周辺の民の利用を妨げない様な造営や管理の方法は、書物等により伝えられる松平定信の庭園観と一致するものである。このことは、南湖の適切な管理方法を考える上で重要な知見であるとともに、松平定信が造園した庭園である南湖の史跡としての評価を高める知見である。

これらの研究結果は、2019 年 2 月発行の『福島大学地域創造』第 30 巻第 2 号で発表され、現在福島大学学術機関リポジトリで pdf 版がダウンロード可能となっている。

論文名：奥州白川南湖真景に描かれた福島県白河市南湖の 1816 年当時の生物多様性と土地利用

著者：黒沢高秀

掲載雑誌，ページ：福島大学地域創造 第 30 巻第 2 号 87 -97 ページ

発行年月：2019 年 2 月

福島大学学術機関リポジトリ

<http://ir.lib.fukushima-u.ac.jp/repo/repository/fukuro/>

(お問い合わせ先)

福島大学資料研究所

共生システム理工学類教授 黒沢高秀

電話：024-548-8201

メール：kurosawa@sss.fukushima-u.ac.jp



図 1. 奥州白川南湖真景．上：從南方望共樂亭圖とそこに記された景勝地等の名称．下：自共樂亭望南方圖とそこに記された景勝地等の名称．



図 2．從南方望共樂亭圖の月待山沖を飛行している，コウノトリと考えられる鳥類．尾部が黒く足が長いなどの特徴からコウノトリと思われる．コウノトリは明治時代の狩猟による乱獲により各地で姿を消し，1971年には日本で野生絶滅となった．2005年以降，再導入が試みられている．



図 3．自共樂亭望南方圖の有明崎のヒシクイと考えられる鳥類．首が長い点，カモ類と思われる鳥より大型な点，茶色い点より，マガン類と思われ，特にくちばしの先が黒く描かれていることからヒシクイと思われる．現在ヒシクイの国内の生息地は 20ヶ所以下に限られており，南湖では見られない。



図 4 .従南方望共樂亭圖の鏡の山のススキと考えられる草原 .アカマツと考えられる樹木が、尾根部は緑、谷部は黄緑で表された植生から突出した形で生育している。当時の里地の一般的な状況から、この植生は茅場、すなわちススキ草原を表しているものと考えられる。放置していれば数年でアカマツなどの先駆樹種が侵入、生長し、15 年も経てばこれらの若齢林が見られるはずであるが、そのような様子は全く描かれていない。南湖を造営後も、茅場としての利用が継続されていたことを示すものと思われる。

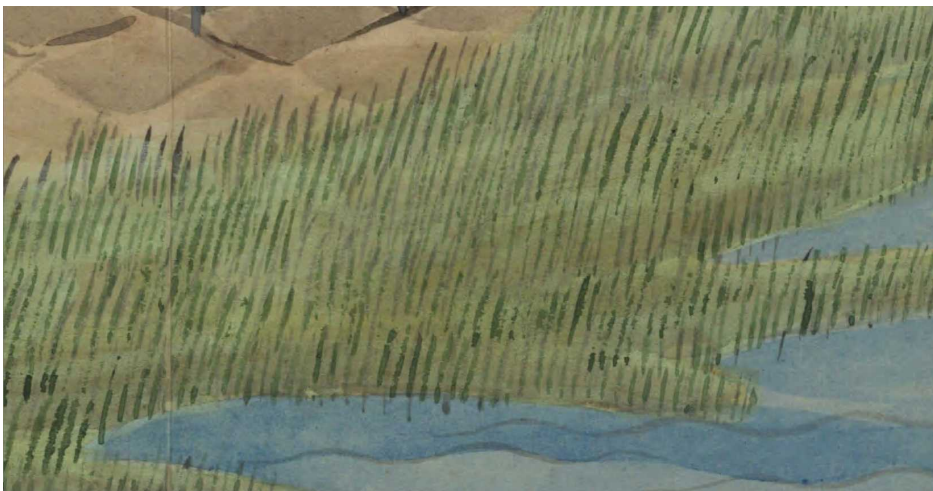


図 5 .従南方望共樂亭圖の松風の里と有明崎間の湖岸に描かれたヨシと考えられる草本 .ヨシが生育するような湿地は、放置していれば数年でヤナギ属やハンノキなどが生長し、15 年も経てばこれらの若齢林が見られるはずであるが、そのような様子は全く描かれていない。ヨシ刈りなどの草刈りが行われていたことを示すものと思われる。